

砂漠の町とサフラン酒

小川未明

青空文庫

むかし、美しい女うつく おんなが、さらわれて、遠い砂漠とお さばくのあちらの町まちへ、つれられていきました。疲つかれているような、また、眠ねむいように見える砂漠さばくは、かぎりなく、うねうねと灰色はいいろの波なみを描えがいて、はてしもなくつづいていました。

幾日いくにちとなく、旅たびをすると、はじめて、青い山影あお やまかげを望のぞむことができたのであります。

そのふもとに、小さな町ちい まちがありました。女おんなは、そこへ売うられたのです。女自身おんなじしんをのぞいて、だれも、彼女かのじよのふるさとを知るしるものはありません。また、だれも、彼女かのじよの行方ゆくえを悟さとるものとなかったのであります。

かのじよ
彼女かのじよは、ここで、その一生しょうを送りおくました。サフラン酒しゅを、この町まちの工場こうばで造つくっていました。彼女かのじよは、その酒さけを造つくるてつだいをさせられていたのでした。

つき まど あか
月つきが窓まどを明あかるく照てらした晩ばんに、サフランの紅あかい花はなびらが、風かぜに
ゆうがた
そよぐ夕ゆう方がた、また、白しろいばらの花はながかおる宵よいなど、女おんなは、どん
こども
なに子供こどものころ、自分じぶんの村むらで遊あそんだことや、父母ふぼの面影おもかげや、自じ
ぶん いえ なか
分の家いへの中なかのようすなどを思おもい出だして、悲かなしく、なつかしく思おもつ
たでありますよう。

おも
いくら思おもつても、考かんえても、かいなわすいものならば、忘わすれようと
つとめました。彼女かのじよは、生うまれたふるさとのことを、永えい久きゅう
おも
に思おもうまいとしました。また、育そだてられた家いえのことや、村むらの光ありさ

ま景などをかんがえまいとしました。

美しく、みずみずしかった女は、いつとなく、堅い果物のよ

うに黙つて、うなだれているようになりました。人がなにをきい

ても、知らぬといいました。

「この女は、おんな、つんぼではないだろうか？」

「あの女は、おんな、きつとおしにちがいない……。」「

そばの人々は、皮肉にも、彼女をそんなようにいいました。

彼女は、まだそれほど、年をとらないのに、病氣になり

ました。そして、日に、日に、衰えていきました。

「どうせ、わたしは、家に帰られないのだから……。死んでしまつ

たほうが、かえって幸福であろう。」と、彼女は思いました。

しかし、彼女かのじよは、なにも口くちにはいわなかったものの、胸むねの中うちは、うらみで、いっぱいでありました。どうかして、このうらみをはらしたいと思おもいました。

彼女かのじよは、小指こゆびを切りました。そして、赤あかい血ちを、サフラン酒しゅのびんの中なかに滴たりました。ちょうど、窓まどの外そとは、いい月夜つきよでありました。びんの中では、サフランの酒さけが醸かもされて、プツ、プツときさやかに、泡あわを吹ふく音おとがきこえていました。サフランの酒さけの色いろは、女おんなの血ちで、いつそう、美うつくしく、紅あかく色いろづきました。

女おんなは、それから、まもなく死しんでしまったのです。彼女かのじよの体からだは、異郷いきようの土つちの中なかに葬ほうむられてしまいました。その年としのサフラン酒しゅは、いままでになかったほど、いい味あじで、そして、美うつくしい紅あか

みを帯びていました。

いい酒ができたときは、その酒を種子として造ると、いつまでも、その酒のようにできると、いい伝えられています。この町の人は、その酒の種子を絶やしてはならないといつて、珍しく、いい色に、いい味に、できた酒をびんにいれて、地の下の穴倉の中に、しまつてしまいました。

この町のサフラン酒は、ますます特色のあるものとなりました。女は、とうの昔に死んでしまつたけれど、その血の色を帯びて醸される酒は、幾百年の後までも、残っていました。そして、その魔力をあらわしていました。

砂漠の中の町……赤い町のサフランの赤い酒……それは、いつ

たい、どうした魔力まりよくをもっているのでしょうか？

* * * *

砂漠さばくの中なかの赤い町あかまちは、不思議ふしぎに富とんでいました。それは、人にんげ間の生いき血ちを吸すうからだといわれていました。また、その町まちは、魔女まじよの住すむ町まちだといわれていました。美しい女おんなが、たくさんいるからです。美しい女おんながたくさんいるというよりは、この町まちの女おんなは、みんな、不思議ふしぎに美しいものばかりだといわれるのでした。そのわけは、もと、この町まちの女おんなが、南みなみから、北きたから、また東ひがしから、世せ界かいの方ほう々ぼうから、さらわれてきた、種族しゅぞくのちがった、美しい女おんなたちの子孫しそんであるからです。長い間ながあいだに、異ちがった種族しゅぞくの種子たねと種た子ねとが結むすび合あって、いつそう美しい人にんげん間うが生まれたことに、不

思議しぎがありません。

いつしか、砂漠さばくの中なかに、赤い町あかまちがあり、そこには、味のいいサフラン酒しゅがあり、きれいな女おんながいるということが、伝説でんせつのように、世界せかいの四方ほうに拡ひろがりました。あるものは、それを信しんぜずにはいられませんでした。また、あるものは、それを疑うたがわずにはいられませんでした。

しかし、砂漠さばくを越こえていくと、あちらの山やまに砂金さきんがで出るということ、また、いろいろの宝ほう石せき類るいがで出るということだけは、たしかでした。

ダイヤモンドや、ほかの宝ほう石せきなどが、ときおり、砂漠さばくのあちから、送おくられてきたからです。

どこの国^{くに}でも、いつの時代^{じだい}でも、若い^{わか}ものは冒険^{ぼうけん}を好み^{この}みます。
 また、働^{はたら}いて身^みをたてようと思^{おも}います。広^{ひろ}い、広^{ひろ}い、砂漠^{さばく}のはて
 から、砂金^{さきん}や、ダイヤモンドや、また、いろいろな珍^{めづ}らしい宝^{ほう}石^{せき}
 が出^でるとい^こうことを聞^きくと、彼^{かれ}らは勇^{いさ}んで、それを掘^ほりに出^でかけ
 ようとしたのでした。どんなに、その旅^{たび}が長^{なが}く、つらくとも、出^で
 かけようとしたのでした。

らくだや、羊^{ひつじ}に、荷^にをつけて、彼^{かれ}らは、砂漠^{さばく}の中^{なか}をあるいてい
 きました。毎^{まい}日^{にち}、毎^{まい}日^{にち}、同^{おな}じような単^{たん}調^{ちよう}な景^け色^{しき}がつづき
 ました。そして、むし熱^{あつ}い風^{かぜ}が吹^ふいていました。

「まだ、水^{みづ}のあるところへはこないだろうか？」

「まだ、あちらに山^{やま}が見^みえないかしらん。」

こうして、彼らは、旅をつづけていますと、ある日のこと、は
 るかの地平線に、青い山の姿をみとめたのであります。彼らは、
 どんなにうれしかったであります。たちまち元気が恢復し
 ました。はやく、あの山へいつて働こうと思つたからです。彼ら
 は、ぴかぴか光る黄金色の砂を幻に見ました。また、すきのさ
 きに、きらきらと光る石のかけらを空想しました。赤い寶石
 や、ダイヤモンドの数々が、自分らの掌の上で輝いている有り
 様を想像しました。みんなは、道を急ぎました。赤い町が、や
 がて彼らの目の前にあらわれたのです。

砂漠の中の赤い町、それは、まったく夢の世界でありました。
 サフラン酒は、あふれていました。美しい女が、唄をうたいなが

ら、町の中まちなかをあるいていました。南方なんぽうの夜よるは、あたたかで、月つきが絹地きぬじをすかして見るみように、かすんでいました。

「このお酒さけを召めしあがると、疲れつかがなおってしまいます。」と、美しい女うつくおんなたちがいいました。

みんなは、喜よろこんで、サフランの赤あかい酒さけを飲のみました。すると、女おんなたちのいったように、たちまちのうちに、疲れつかがなおってしまいました。ほんとうに、いい気持きもちちになつてしまいました。

「なんとという紅あかい、美うつくしい色いろだろうな。」といって、若者わかものはコップの酒さけを、燈火あかりの前まえへ掲かかげてながめたりしました。

元氣げんきを恢かい復ふくすると、彼かれらは、いよいよ山やまの方ほうに向むかつて、働はたらきにゆくために出しゅつ発ぱつしたのです。彼かれらは、山やまへいって、岩いわを

砕^{くだ}いたり、土^{つち}を掘^ほつたりして働^{はたら}きました。

しかし、いつまでも、遠^{とお}い他^た国^{こく}で、暮^くらすという気^きにはなれ
せん。彼^{かれ}らは、ふるさとが恋^{こい}しくなりました。そして、すこし
もたくさん、金^{かね}をためて、故^{こきよう}郷^{かう}に帰^{かえ}つて、家^{うち}の人^{ひと}々^{びと}を喜^{よろこ}ばし、
安^{あん}楽^{らく}に日^ひを送^{おく}りたいと思^{おも}つたのであります。

彼^{かれ}らは、ふたたび、砂^{さばく}漠^{なか}の中^なを旅^{たび}をする用意^{ようい}をして、山^{やま}から出^で
て、ふもとをさして急^{いそ}ぎました。赤^{あか}い町^{まち}が、「いまお帰^{かえ}りですか
？」というように、目^めの前^{まえ}に笑^{わら}っているものであります。

「くるときに、この町^{まち}で、サフラン酒^{しゆ}を飲^のんだが、その酒^{さけ}の味^{あじ}は
忘^{わす}れることができなかつた。どれ、ひとつゆつくりと酒^{さけ}を飲^のんで
いこう……。」

彼らは、町にはいると、赤い酒のコップを手にししました。

酒場の前を、美しい女がやさしい、いい声で唄をうたつて通り

ました。ちょうど、その唄の声は、海で潮のわく音のようであり、

女たちの姿は、春風に吹かれるこちようのごとくに、見られた

のでした。

一杯、また一杯と、飲んでいるうちに、すっかり頭の中にあつ

た考えというものが、空になつてしまいました。そこで、持つて

きただけの金を、町の中で使いはたしてしまつたのです。

彼らは、酒の酔いがさめきらぬうちに、まったく夢心地でこ

の町を立つて、出かけましたが、いつしか砂漠の中で、酔いがさ

めて、天幕のすきまから星の光を仰ぐと、はじめて、なにも持た

なくては、いまさら故郷へは帰れないと思つたのでありました。

彼らは、ふたたび山へもどりしました。そして働きました。また

岩を割つたり、土を掘つたりしました。

金がたまると、こんどこそは、故郷へ歸つて、みんなの顔を

見ようと思ひました。彼らは山を下つたのであります。

赤い町が、すぐ目の前に近づきました。彼らはサフラン酒の味

を、思い出さずにはいられませんでした。

「もう、ふるさとに歸れば、飲もうと思つても、飲まれないのだ

から、一杯だけ飲んでゆこう……。」と思ひました。

美しい女たちは、悲しい、やるせない唄をうたいながら、酒場

の前をあるいていました。若者たちは、夕焼けのように紅い、

サフラン酒しゅさかずきの杯はちを、唇くちびるにあてて味あじわっていました。一杯……もう
 一杯ぱいといううちに、頭あたまがぼんやりとしてしまいました。そして、
 持もっているものは、みんなこの町まちで費つかいはたしてしまつて、つい
 に故郷こきやうに帰かえることができませんでした。
 彼かれらは、やがて年としをとり、氣力きりよくがなくなり、永えい久きゆうにふる
 さとを見捨みすてなければならぬのでした。
 そして、砂漠さばくのかなたに、赤い町あかまちが、不思議ふしぎな、毒々どくどくしい花はな
 のように、咲さき誇ほこっているのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷

初出：「童話」

1925（大正14）年6月

※表題は底本では、「砂漠《さばく》の町《まち》とサフラン酒《しゅ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

砂漠の町とサフラン酒

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>